
戦場洋琴

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場洋琴

【Nコード】

N1185I

【作者名】

燕

【あらすじ】

銃声・悲鳴・戦場。××年後の未来の世界は瞬く間に発展を遂げ、弱小国と発展国の差がますます広がっていく。平和条約は廃止され、戦火に見舞われる国々。これは、死と生の狭間を生きた一人の軍人の話である。

辺りを包む乾いた土煙。時折鼻を刺すのは、銃口から上がる煙と焦げた肉の臭い。隣にいたはずの仲間が気付けば足元に転がっている。銃声に混じらぬ程の大声で名を呼ぶが返事はない。

「……………ツクそ！」

嘗ての英雄だと？ ふざけるな。煌びやかな栄光だつて、磨かなければくすみ、いつしか滅ぶではないか。畜生、何が勇衛士だ。何が英雄だ。何が栄光だ。死んでしまつたら全て無くなってしまうではないか。

死骸と成り下がった友の迷彩柄をした軍人用ズボンのポケットから乱暴に銃弾を剥ぎ取った。彼が愛用していた機関銃は、撃たれたと同時に彼方へと吹き飛び無残な形でくたばっている。

「……………スミス、テイスト、モルト、ラフロ……………」

今までの戦時で死んだ仲間の名を呟きながらライフルの薬室に実包を一つずつ装填していく。己の身を隠すためのコンクリートの壁もそろそろ限界のようだ。預けている背からヒビが段々と広がっていく感触を感じる。

——生き残れるだろうか、自分は。否……………生き残らなくてはならない。

戦場には合わない、洋琴の繊細な音が耳奥に響いた。彼女は、俺を許してくれるだろうか。

00（後書き）

初めまして。燕^{つばめ}と申します。

戦記物という事でかなり緊張していますが、最後までお付き合い戴ければ、と思っております。
では、行ってらっしゃいませ。

キスト・フィルという男がいた。……否、その男はまだ生きているし現役の軍人なのだからそう言うのは失礼だろう。簡潔に言えば、キスト・フィルという名の英雄がいた。

今から約十年前、国々がまだ機密計画を開始・執行する前。銃や戦車が戦いの主流であった頃だ。人工龍や接木雑種^{キメラ}達が英雄として示唆されず、人が英雄として掲げられていた時期があったのだ。今現在ではそれは信じられない事だが、その時代は確かに存在していた。

銃を巧みに扱い、一瞬にして敵陣を落とす軍隊。軍隊と言えど、隊の人数は五人という少数派。頭脳と肉体を用いて敵を捻じ伏せるその姿。子供達は皆口々にこう言うのだ。

「将来自分は勇衛士^{ゆうえいし}になる」

勇衛士^{ゆうえいし}になるためには二つの国家試験を通過し、器量・人徳に通ずる人間にならねばならなかったが、彼等^{ゆづえいし}の勇ましい背中を追う人間達はそれを拒まなかった。勇衛士^{ゆうえいし}である、とは国で最も気高く、名誉な事であったのだ。

話を戻すが、キスト・フィルという男も勇衛士^{ゆうえいし}であった。勇衛士^{ゆうえいし}として軍隊に配属された時、彼の周りの人間達は心の奥底から彼を褒め称えた。……しかしそれは数年のみの栄光であった……。

勇衛士^{ゆうえいし}が戦場を駆け抜けて早十年。アリストという、この世で最も強い軍勢力と広大な土地を持つ国が、妙な生き物を戦争に出すようになった。という噂が立ち始める。「妙な生き物」はその名も「接木雑種^{キメラ}」と言った。科学的に言くと、接木雑種、通称『キメラ』は、二種以上の胚や体の一部のたんぱく質・分子等から生まれた生き物である。アリストはそれを戦場に放したのだ。

接木^{キメラ}雑種は物心を持たず、獣として地を這いずる。仲間・敵もろとも食い潰し、噛み千切つていく。逃げ出そうとする兵士がいても、豹^{ひょう}の足を持つ接木^{キメラ}雑種からは逃れられなかった。腕一本をなくしただけで生き延びる事が出来た兵士は、包帯だらけの己の足や、一本だけ残った腕を見ながら人語とは思えない言葉を発した。子供の喘ぎにも似たそれに部下は絶句し、精神が崩壊したせいで眼球が右・左へと忙しく動く姿を見た上司は恐怖した。

脳や記憶について詳しい錬金術師（医者）はそんな彼の脳内を視^みた。町を舞台にして行われる戦争はおぞましいものだが、その中に異形の生き物が放り込まれているだけはある。錬金術師は男が接木^{キメラ}雑種に襲われてから気絶するまでのたった一時間の戦争の様子を、丸々一日掛けてやっと見る事が出来た。人の精神を崩壊させるまでに酷い戦場だった。と錬金術師は語る。

仲間だった生き物の肉片が、まだ整備されていない土道の隅に飛び散り、壁には血がはねた跡がいくつも残っている。いや、そこま
でならばまだ普通の戦争だ。そこに放り出されている生き物^{キメラ}が赤黒い息を吐き出しながら獲物を探している。人一人よりやや高いその身長は猫背のように背中から折り曲げられ、長い手足はずりずりと地面を這うばかりだ。しかしふと、足が止まる。立った。そして走る。人間よりも何倍も速い。誰かが見つかった。見つかった『それは男の上司にあたる人物で、名はアールローニーと言った。アールローニーは恐怖に染まった奇声を上げながら機関銃を接木^{キメラ}雑種に打ち込むのに夢中だ。鯨のような頭に体はゴリラといったその姿は正に異型なものだが、回復力や回避能力の方が凄まじい。弾丸が打ち込まれた箇所からは青色の血が飛ぶが、すぐにその血と一緒に弾丸が飛び、穴が開いた部位はむくむくと肉が立ち上がり、いつの間にかに治っている。アールローニーの機関銃に弾が無くなり、カチ、カチという乾いた音がしたかと思えば、鯨の頭をした接木^{キメラ}雑種が瞬く間に彼の頭に齧り付いた。鯨の歯を持つものだから彼が食い千切られるのは一瞬。一気に噴出した赤い血液は接木^{キメラ}雑種を更に興奮させた。気付けば彼

の死肉を漁っている接木雑種^{キメラ}は二匹に増えており、死体の惨さも感じられぬ程に彼の体は滅茶苦茶^{めっちゃくちや}になっていた。手足は既に引き剥がされ、目玉が血の水溜りに浮かび、挟られた腹からは腸が覗いている。上司の死骸を見詰めている男の指先はこれでもかと言う程に震えている。手に持っている機関銃がついに地面に落ちた。二匹いた接木雑種^{キメラ}の内一匹が音に気付き、こちらを向いた。顔は兎で足は蛙、胴体は毛むくじやらで……これは犬だろうか……？ 体の大きさは鯨の顔の接木雑種^{キメラ}より小さく、身長も半分くらいだった。白い兎の顔は血でぐしょぐしょになっており、目は何故か血が固まったような茶色だった。視線がだんだん後ろ後ろへと下がっていく。どうやら男が座りながら後ずさりをしているようだ。次の瞬間、兎がにたと笑った。いつのまにか目の前にいる。大きく開けられた口には血で濡れた前歯と、人間の肉片が残っている舌先。

意識（映像）はそこで途絶えた。

接木雑種^{キメラ}の脅威を知らしめられた軍人は恐れおののき、アリストという国との戦をしようとしなくなった。どの国も腰を低くし、戦争が始まりそうになったら、国中の金を掻き集めてアリストに収める。ただ、あえてアリストに対抗しようとする国も少なくなかった。^{ゆっえいし}勇衛士を前例として多くの優秀な軍団を持つ国、メディアル。目覚しいほどの速さで科学の進歩を遂げた国、カリディア。その他にも国はあるが、どの国もこの二つと同盟を組んでいる国ばかりで、いざとなったらメディアルかカルディアを盾にしようと企むような国ばかりであった。

大体の国を吸収したアリストは一旦戦争を止め、接木雑種^{キメラ}の増殖作業に勤しんだ。カリディアは別の方法で新しい生物を生産、配合し、『人工龍^{ドラゴン}』を創った。蛇や魚、獅子などの生き物を使い、見た目まで龍を完璧に再現。攻撃力の強い動物の分子から出来た最強種族という。しかし今現在実際にそれを戦場に放していない所を見れば、単なる脅しなのかもしれない。一方メディアルはそんな生き物の力を借りず、戦争機械を作る事に勤しんでいる。^{ゆっえいし}勇衛士はこの頃から

廃れ始め、メンバーである五人……キスト、ルディア、カモール、アーン、エリダ達は軍を解散。各国へと飛ばされた。

これは単なる現状報告であるが、戦争はまだ始まったばかりなのである。

01（後書き）

今回は世界観についての話なので、キャラクターは出ませんでしたが。次話からキャラクターがざっくざっく出る……予定です。

俺はその日、やけに浮き足立っていた。きっとそれは、初めて袖を通す軍服の感触と、左胸に掲げられた勲章のせいだろう。そうそう、黒い一つばに迷彩柄をした帽子と黒い頑丈そうなブーツも軍人のものだった。

「母さん、俺やったよ！」

クリーム
淡黄色をした卒業証書を片手に、足の不自由な母がいる部屋の扉を乱暴に開けた。車椅子の車輪がギリりと軋んだ音がする。母はこちらを振り向くと、満面の笑みを浮べる息子の姿、手に持たれているそれ、そして最後に鈍く輝く勲章を見てからこの世の終わりのような顔をした。

「何て顔をしてんだよ。俺は今日から軍人だぜ？ この国の英雄だ！」

「……軍人は英雄じゃないよ。軍隊があれば戦争が起きる」

母は息子である俺に背を向けるとまた指先をせつせと動かし始めた。父が戦争で死に、足を奪われた母は裁縫をして生計を立てていた。働けないことをいつも涙ながらに夜の星へ話す母の姿を知っている俺は母の手から縫い物を取り上げた。

「母さんはもうそんな事なくていいんだよ！ 俺がこれから生計を立てるんだからさ！」

「返しなさい。……お前は戦争に行つてはならない。お前は戦争を見た事がないでしょう」

確かに俺は戦争を見た事がなかった。母の足を奪った戦争は俺がまだ赤ん坊だった頃に起きた。母は俺を抱いて逃げている途中、倒れてきた石柱に足を挟まれてしまったらしい。父は母と俺を逃がすために敵の的となり、機関銃で何度も何度も背を撃たれて死んだ。俺はまだ物心が付かない歳だったから、それについては何も覚えていなかった。

「もうすぐこの国は戦争が起こる。俺は銃の名手として活躍するんだ」

「……多くの人を殺しても良いというのかい」

「ああそうだよ。俺は国のため、母さんのために人を殺すんだ」

次の瞬間、世界が左右に揺れた。

じんじんと痛む頬に触れてから、母を見る。母は何食わぬ顔で俺から取り返した縫い物を見詰めていた。

「今に見てる！俺は英雄になって母さんを見返すからな！」

乱暴に閉められた扉をちらりと横目で見てから、母は息子が落としていった卒業証書を拾った。上記に記されている名は間違いない。己の息子の名だ。軍事学校は死んでも通わせなくなかったのに、とある銃の名手に息子は連れて行かれた。学費は免除されたが、将来引き金を引くたびに人を殺していく息子の姿を想像したくはなかった。

キスト・フィルという名の青年は、意味も分からず家を閉め出され不満だった。己は十八という若輩であるから、考えがどこか甘かったのかもしれない。と、ようやく分かり始めたのは、天高く上が

つていたお天道様が沈んでいく頃だった。今日の夕日は綺麗だ。…昨日雨が降ったからかもしれない。

水溜りに映る自分の相貌は少し童顔だった。短く刈り上げられた金髪に、青い瞳は自分の父の姿を彷彿させた。写真でしか見た事になかったその姿は、凛々しくも男らしい。自分にとって憧れの存在だ。優しい顔立ちをした黒毛黒髪の母に顔立ちは似てしまったから、童顔なのかもしれない。タレがちな瞳は、大人になればキリツと引き締まるだろうか。

ふと、胸元で輝く勲章に手をやった。この国で最も気高い生き物とされる竜が獅子に巻き付いている様を表したそれは、金と銀で装飾されている。獅子の瞳に嵌めこまれている宝石は紅玉ルビーのように紅い。そういえば卒業生には自動的に階級が儲けられ、それに見合った宝石が勲章にはめ込まれるらしい。下から、紫水晶アメシスト・真珠パール・緑柱石ルビー・紅玉サファイア・青玉ダイヤモンド・金剛石。俺の階級は高いんだ。と己の勲章を誇りに思ってみる。

でも自分はまだまだだ。スミスは青玉サファイアだったし、ラフロも同じものだった。ああでもティストは紫水晶アメシストだった。

キストは玄関の階段から重い腰を上げると、家の呼び鈴を鳴らした。勿論母が出る。

家に入れてもらった後。母には謝ったがそれでも軍人になりたい、と言ったらまた頬を引っ叩かれた。容赦ないビンタに少し涙目になりつつも、ひりひりと痛む頬を撫でていると、母は涙を流しながら俺の胸板を叩いた。何度も何度も叩いた。でも、最後には軍人になる事を許してくれたのだから、喜ぶべきだ。

しかし、これはまだ始まりに過ぎない。

02（後書き）

キスト・フィルの青年時代です。

ここからゆっくり過去・現在を何度も繰り返していった話を進めていきたいと思います。

ご観覧ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1185i/>

戦場洋琴

2010年10月9日11時28分発行